

源水閣

国際交流とこれからの図書館の課題

趣味と図書館

新刊紹介

経営学の現在

2010年度図書館ガイダンス案内

国際交流とこれからの図書館の課題

—北京大学図書館（中国）に1000冊寄贈—

図書館長 谷口文章



写真① 北京大学図書館

1. 国際交流—中国・台湾・マレーシア—

昨年（2009年）9月5日に、北京大学環境科学工程学院と甲南大学人文科学研究科の環境・芸術・思想分野（人間科学専攻）との間に個別協定が結ばれ、教育研究・学術文化交流が推進されている。その一環として、甲南大学の図書館では、図書1000冊を寄贈することになった。北京大学は文系も卓越した総合大学であり、今回は社会科学、人文科学を中心とした文献の要望が多かった。寄贈文献の内容は、歴史、社会、心理、日本文学、法律、経済などの分野が主なものであった。また他の国、とくに日本からみた中国に関する資料も多く所望された。

北京大学の図書館は、中国でもっとも古い図書館である。その床面積は53,000㎡であり、600万冊以上の蔵書コレクションを有し、中国一の規模を誇っている。そのうちの150万冊は中国古代の文献であり、数千冊は稀覯本である。また24,000の拓本の書があり、56,000の拓本を保有している。いうまでもなく、稀覯本や拓本は、貴重な人類遺産であり芸術的価値を有するだけでなく、伝統文化を学術的に研究するために必要不可欠な価値をもっている。この意味で、海外の大学や図書館、情報機関からも注目されている。

図書館の新分野であるディスク情報とネットワーク・リサーチのエリアでは、キャンパス内に100に近いワークステーションと大容量のCD-ROMを有し、DIALOG、OCLC、UNCOVER、UMI、EBSCOのような海外のネットワーク・データベースとeジャーナルもある。この分野はオンライン・カタログによって、館内だけでなくキャンパスのなかの利用者にも提供され、CD-ROMのすべてのコレクション、インターナショナル・プール・リサーチ、トピックスの最新情報、論文検索・引用にアクセスできるようになっている。

写真①は、北京大学の図書館（正面玄関）である。東洋一の図書館に値するような威風堂々とした建物である。写真②は、エントランス・ホールであり、美しい吹き抜けの広いスペースに受付と学習ホールがある。写真③は、閲覧室の一例であるが、各階にこのようなゆとりのスペースがとられている。写真④は、図書館長朱強先生との交流の情況



写真② 北京大学図書館
受付・学習ホール書館



写真③ 北京大学図書館閲覧室



写真④ 北京大学図書館長 朱強先生



写真⑤ マレーシア・マラヤ大学からの
訪問（図書館前）

である。この度の寄贈図書についてと、今後の交流について話し合った。写真左手前の模型は、現在の図書館と同じ規模のものが、横に並行して近々新築されるとのことであった。この新館は、伝統的な建築様式で造られるとともに民族的博物館も兼ねるとのことであった。

ところで、北京大学だけではなく、甲南大学では、この数年間アジア・エリアにおける教育研究・学術文化交流が進められている。その一環としての北京大学図書館への寄贈であったが、その後、昨年10月に台湾・国立政治大学、11月にはマレーシア・マラヤ大学から本学図書館に訪問があった（写真⑤）。文部科学省「留学生受け入れ30万人計画」が発表されて、各大学および各図書館は多文化サービスの整備が必要とされている。そして、海外の大学においても日本文化・日本語教育、アジア研究が進められており、それに対応できる人的・施設の・資源的設備の充実が課題である。

本館においても、アジア・エリアを視野に入れた国際化が、さらに推進されねばならないであろう。

2. これからの図書館の課題

これからの図書館の課題として、国際交流とともに、(1) 電子化の促進、(2) 図書館運営環境の充実、(3) 機関リポジトリの推進、(4) 評価の問題がある。

第一の電子化については、一般に大学間の連携に欠けていたこと、電子化の資料の偏り、メタデータの不十分さ、検索機能の弱さなどがある。第二の運営環境の充実については、インターネット、サーチエンジン、電子ジャーナル

が飛躍的に進歩するなかで、図書館の役割や存在意義が改めて問われている。第三に、機関リポジトリの導入の課題がある。これは、学術研究、教育活動を促進し、国際競争の強化のために、大学や教育機関が有しているコンピューターなどの設備、基盤的ソフトウェア、データベース、コンテンツ、人材や研究グループの情報を超高速ネットワークで共有するための基盤である。本館ではまだ手がつけられていないが、近い将来の最重要課題である。それに付随して研究者の著作権についての理解も進める必要がある。さらに図書館システムと教務システムなどの連動も視野に入れておくことも大切である。第四に評価についてであるが、教育内容・方法、学生支援、施設・設備の評価基準に沿って、利用学生1人あたりの冊数、受入れ冊数、貸出数、図書館費などが評価指標となる。さらに地域貢献に関する協定締結件数、住民向け地域貢献事業の開催状況や住民・企業への開放状況も評価される。しかしながら、本学では体系だった評価体制が不十分であることが課題である。もちろん本学でも各学部、各組織において自己評価・自己点検の評価委員会におけるプレゼンテーションが実施され、本館も具体的な評価の問題に対処する準備を行いつつある。

本館の固有の課題として、最新のサイバーライブラリがいち早く開設されたが、その後あまり進歩がない。さらに、情報系のリテラシーとアーカイブとしての図書との統合、および図書館の地域連携の課題があげられる。本館も市民開放として、東灘区の住民、卒業生にも開かれてはいる。しかし新設の二学部との連携も含めて、神戸市、芦屋市、阪神間へ開放された図書館として社会的役割の拡大のさらなる努力が望まれている。